様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０３０６

研究課題名（和文）トールキンの「ケルト」観の未刊草稿による解明

研究課題名（英文）Tolkien's views on "the things Celtic": a study of his unpublished manuscripts

研究代表者
辺見　葉子（HEMMI, Yoko）

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：４０２４５４２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、従来のトールキン研究から抜け落ちていた「『ケルティシスト』としてのトールキン」という視座から、『指輪物語』をその未刊の草稿原稿を含めて考察することを目的とし、テキスト変遷を詳細に検討すべく、米国マーケット大学と英国オックスフォード大学における調査を行った。
マーケット大学図書館のトールキン・アーカイブでは『指輪物語』の追補篇Fの言語に関する草稿の、オックスフォードのボードリアン図書館ではトールキンのブリテン観の根幹を成すケルト語(British-Welsh)観についてのエッセイ"English and Welsh"の草稿のトランスクリプトを、それぞれ作成することが出来た。

研究成果の概要（英文）：With a hitherto unattempted aim to study Tolkien as a "Celticist," this project undertook an extensive research of Tolkien's unpublished manuscripts in the archives of Marquette University Library, US, and the Bodleian Library, Oxford University, UK. At Marquette, I was able to transcribe all the versions of the Appendix F, "On Languages," with a couple of interesting discoveries with which I was granted permission by Tolkien Estate to publish. At Bodleian, I examined all the papers of "English and Welsh" and successfully traced the development of Tolkien's concept of British-Welsh as the "native language," which is crucial to the understanding of Tolkien's views on "things Celtic," and thus important in assessing Tolkien as a Celticist.

研究分野：中世英文学、ケルト語文学

キーワード：J.R.R. トールキン　『指輪物語』　English and Welsh

１．研究開始当初の背景

J. R. R. トールキン研究は、従来、古英語・中英語・北欧諸語などトールキン自身の研究専門領域との関連に重点が置かれ、いわば「ゲルマニスト」としてのトールキンが投影された作品という視点から行われてきた。

しかし「イングランドに捧げられた神話」とされる『指輪物語』をはじめ、トールキンの神話体系には、特にその言語世界において顕著であるように、彼のブリテン島における「ケルト」観（=ブリテン島の基層言語である British-Welsh 観）が投影されていると考えられ、その観点から、換言すると「ケルティシスト」としてのトールキンの再評価という視座を導入しての研究を進めてきた。

具体的には、*English and Welsh* というエッセイ—トールキンがブリテン島におけるケルト語（British-Welsh）を彼自身を含むブリテン島の住民すべての "the *native language*"と見なす、独自の"*native language*"観を展開させている–を『指輪物語』のパラテクストとして扱うことによって、トールキンの「ケルト」観のあぶり出しを試みてきた。

作家としてのトールキンは、夥しい量の未刊手稿を遺しており、最新のトールキン研究動向は、彼の未刊手稿をも包括した研究を必須条件とするようになった。このような研究動向の中、自分の研究の発展に必要な未刊手稿の調査を行っていないという行き詰まり状況を打破するには、手稿を所蔵する米国マーケット大学および英国オックスフォード大学における滞在し、調査することが必須であった。これを可能にすべく、本研究助成を申請した。

２．研究の目的

⑴ トールキンの「ケルト」観の解明に最重要な資料となる、オックスフォード大学、ボードリアン図書館所蔵の *English and Welsh* の未刊草稿調査を行い、彼の"the *native language*"という概念を詳細に検証する。

⑵ 『指輪物語』に投影されたトールキンの「ケルト」観・ブリテン観の解明の鍵となるのが、中つ国におけるマイノリティ言語、Dunlendish である。これは、中つ国においていて、ブリテンにおいての歴史上の British-Welsh に相当すると考えられる言語であり、出版稿での情報はごくごく限られている。アメリカ、マーケット大学図書館所蔵の *The Lord of the Rings* の未刊草稿のうち、Dunlendish や、言語観に関する記述を含む部分（主に Appendix F）の調査により、トールキンの「ケルト」観・ブリテン観解明の手がかりとする。

⑶ オックスフォード大学の、トールキンが所属していた英文科の図書館に所蔵されている、トールキン自身の蔵書のうち、「ケルト」関係の研究書を中心にその調査を行う。特に地名研究書やウェールズ語文法書など、トールキンが何を読み、書き込みなどから興味のあり方を見定め、トールキンのケルト語観の学問的基盤とその形成の過程に光を当て、「ケルティシスト」としてのトールキンの姿に迫る手がかりとする。

３．研究の方法

(1) トールキンの未刊草稿は、トールキン財団により一切のコピー、スキャン、写真撮影などが禁じられているため、アーカイブに滞在し草稿のトランスクリプトを手作業で作成する。

(2) 作成したトランスクリプトの分析によって、テキスト変遷を明らかにする。

(3) オックスフォード大学英文科所蔵のトールキンの蔵書の調査。特に書き込みの調査を行う。

(4) トールキンが作品執筆当初参照可能だった「ケルト」・「ブリトン語／ブリトン人」に関する研究書の分析を行う。

４．研究成果

本研究の目的であったトールキンの手書き未刊手稿調査は、解読が時として極めて困難なものであり、トランスクリプト時間のかかるものであったが、以下のような成果をあげることが出来た。

(1) オックスフォード大学ボードリアン図書館所蔵の *English and Welsh* の未刊手稿調査に関しては、トールキン財団の厳しい制限により、トランスクリプト作成は、すべて手作業で行わなければならず、時間のかかる、また時に極めて解読の難しい作業であったが、在オックスフォードの世界有数のトールキン研究者である John Garth の助力を得ることが出来た。これによって、まだエディション作成には、さらなる調査を要するものの、トランスクリプトの精度向上を格段に遂げることが出来た。

この草稿の調査により、出版バージョンだけでは見えなかった、トールキンの「ケルト・ブリトン語」観、特に彼の“*native language*”の概念の発展過程の詳細が浮かび上がり、トールキンのケルト語観・ブリテン観に迫ることが出来た。

(2) オックスフォード大学英文科図書館所蔵のトールキンの蔵書の調査、および書き込み調査からは、トールキンの「ケルティシスト」としての素養の形成過程の一端を見てとることができた。特に、*English and Welsh* の未刊草稿における欄外書き込みの本の題名のイニシャルと一致するトールキンの蔵書を突き止めることが出来たため、調査は実りの多いものとなった。

(3) マーケット大学のトールキン・アーカイブ調査では、『指輪物語り』の追補篇の言語に関する部分のトランスクリプトを集中的に行った。特に Dunlendish という、トールキンのブリトン語(British-Welsh)観が投影されているマイノリティ言語に関する手稿調査の過程でいくつかの発見があり、この発見を論文として発表するための許可をトールキン財団から得ることができた。

(4) 研究期間中に行ったカラマズーの国際中世学会でのトールキンに関する研究発表内容を評価され、英米のトールキン最高峰の研究者で組織される Tolkien Symposium のメンバーとして受け入れられた。2014 年夏には、マーケット大学の草稿調査についての発表を行い、それが評価されて、上の(3)で言及したトールキン財団への許可申請にあたって、カール・ホステッター、アーデン・スミス等、トールキン財団の信任の厚い研究者からの推薦を受けることが出来、論文執筆に必要な箇所のスキャンも含む、許可が極めてスムーズに下りた。

5．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0　件）

〔学会発表〕（計　6　件）

① Yoko Hemmi, “Tolkien’s MSS on Languages at Marquette.” Tolkien Symposium, Kensington Row Bookshop, Maryland, USA, 2014.08.01.

② 辺見葉子「トールキンと詩の伝統：ケルトの唄人トールキン」国際アーサー王学会日本支部大会、慶應義塾大学日吉キャンパス、神奈川県横浜市、2013.12.14

③ Yoko Hemmi, “A Looming Luminary: Kenneth Jackson’s invisible presence in Tolkien’s ‘English and Welsh’ lecture.”48th International Congress on Medieval Studies, Western Michigan University, Kalamazoo, USA, 2013.05.09.

④ Yoko Hemmi, “Tolkienesque Transformations: Post-Celticism and Possessiveness in *The Lay of Aotrou and Itroun*.”The Return of the Ring (Tolkien Society Conference), Loughborough University, Loughborough, UK, 2012.08.19.

⑤ Yoko Hemmi, “Tolkien in International Higher Education: Japan.” The Return of the Ring (Tolkien Society Conference), Loughborough University, Loughborough, UK, 2012.08.16

⑥ 辺見葉子「『ケルト』の観点から『指輪物語』を語る」日本イギリス児童文学会　中部支部　春の例会、名古屋大学、愛知県名古屋市、2012.06.30

〔図書〕（計　1 件）

① Yoko Hemmi, *Vois de Mythes, Science des Civilisations*, Peter Lang, 2012 (“The Marvels of the Forest of Brocéliande in a Colonial Context: Chrétien de Troyes and Wace,” pp. 179-194).

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
辺見 葉子　　（ HEMMI, Yoko　）
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：40245428

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：